「敬愛の日」にあたって

来る六月三日は、創立者長戸路政司先生のご命日です。創立者の業績と遺徳を顧み、本校と学園の発展を改めて期する日として、六月三日は「敬愛の日」と定められ、休業日となっております。

私学には建学の精神があり、建学の精神を身につけた人材を育て、世に送り出すことを教育目標としています。本校の建学の精神は、高等学校としての本校の個性の礎であるとともに、本校の教育が、広く世界へ向かっていくための礎でもあります。

それでは、本校の建学の精神「敬天愛人」の由来と、その意義はどうなっているのでしょうか。今は亡き長戸路信行先生の著「野の花」から一部抜粋要約すると次のようになります。

アメリカの高名な進歩的政治家であるブライアンは一九〇五年（明治三十八年）十月に来日し、一ヶ月の間各地を講演した。大変な評判で、当時東京帝国大学の学生であった創立者・長戸路政司はその講演を聴き、深い感銘を受けた。その講演の中で長戸路政司は「西郷南洲の偉さを教えられ、『敬天愛人』の句に対する最初の開眼」を得たのである。そして、早速自分の下宿に西郷の肖像と敬天愛人の額を掲げたという。学園の名がその句に由来し、建学の精神となっている。

この『敬天愛人』の意義を解説することは容易なことではない。『西郷南洲遺訓』には

一　道は天地自然の物にして、人はこれを行うものなれば、天を敬するを目的とす。天は人も我も同一に愛し給うゆえ、我を愛する心を持って人を愛するなり。

一　人を相手にせず、天を相手にせよ。天を相手にして己をつくし、人を咎めず、我が誠の足らざるを尋ぬべし。

一　過ちを改むるに自ら誤ったとさえ思い付かばそれにて善し。そのことをば棄て、顧みず、直に一歩踏み出すべし。過ちを悔しく思い、とり繕わんとするは、たとえば、茶碗を割り、そのかけらを集め、合わせ見るも同じにて、詮も無きことなり。

とあり、長戸路信行先生はこの『西郷南洲遺訓』を「何回も何回も繰り返し誦するほうがよい。」とも述べられています。

さまざまな問題を考え、解決していくために、学問があり、思想があり、実践があるのです。これらの学問を担い、思想を担い、実践を担い得る人材を育成するために「敬天愛人」の教育はあります。

現代のさまざまな問題に取り組み、解決に立ち向かっていくためにも、敬愛大学八日市場高等学校の生徒諸君には、『知・徳・体』を大切にし、個性あふれる感性豊かな人間となってもらいたいと思います。

生徒、教職員全員が、「敬愛の日」に、今一度、建学の精神「敬天愛人」のこの四文字のもつ意味を考え、この日が本校の更なる発展に資する日となることを願ってやみません。

令和五年六月一日

学校法人長戸路学園
理事長　黒須健治
敬愛大学八日市場高等学校
校長　長谷川茂